UN：KNOWN

エイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＵＮ：ＫＮＯＷＮ

【Ｎコード】
Ｎ７２２６Ｊ

【作者名】
エイト

【あらすじ】
現実を生きて、変わらない日常に辟易した少女は非現実を望む。彼女の望み通り日常が変化した時、既存の価値観は崩れ新たな価値観が姿を現す。だが、その新たな価値観が自分自身を蝕んでいると彼女は気づく。
少女は惑わされ、踊らされ、それでも自分の道を進む。だが、それが誰かに決められた道だと気づいた時、全てが終わる。その時、彼女は何を選択するのだろうか。

一つの物語の始まり

人が持っている価値観とは重要なものである。というのは、人が物事を考える時、例えば、善悪について考えたとしよう。あなたが善悪を判断する時、その判断基準は何であろう。常識？そう、おそらく常識であろう。ここで疑問だ。常識とは世間一般に通じるもののことだが、果たしてあなたが常識と呼ぶそれは本当に世間一般で通じるだろうか。あなたも今まで自分が常識だと自分が考えていたことが実は非常識だと知らされたことが、1度や2度はあるはずである。むしろ、あって然りだ。なぜならば、あなたが常識と呼ぶもの、または価値観は普遍的なものとは程遠い、むしろ、あなたの中でのみ通じるものだからである。よく考えてもらいたい。あなたの常識が、価値観が世間一般で通じるはずがないだろう？価値観とはその人が人生を歩む過程で形成されていくものであり、もしも全ての人間が同じ価値観、常識を持っていたとすれば、それは全ての人間が同じ全く狂いのない、他人であるにも関わらず同じ人生を歩んできたということになり、そうでなければ、何らかの洗脳を受けたということになってしまうのだ。それはありえない。

今これを読んでいる読者の年齢を筆者は知るよしもないので、すでに思春期を終えている人はそのころを思い出して、思春期の真っただ中な人は自分と比べてみて、まだ思春期を経験していない人は想像しながら、読んでもらいたい。

話は戻る。自分が持っている価値観とはいうまでもなく外向きのものである。というのは、自分が何かの価値を判断する時、それはほとんどの場合、自分の周りにあるものだからだ。自分の周りのものを判断してきたのなら、外のものを基準にした価値観ができあがる。さて、あなたは自分を客観的に理解できるだろうか。こんな質問はどうだろう。あなたにはどのくらいの価値がありますか。もちろん、具体的に応えることはできないだろう。判断する時、こうす

るはずだ。自分を外の世界に置き、そこに存在するものを基準にして計る。基準がなければ、計れないのだから。人は他人の価値を判断することには慣れているのだが、自分の価値を判断することになれていない。それは当り前であり、特に不思議はない。だが、誰もがある年齢に来れば、一度は思う事があるだろう。自分の価値とは何なのか。どうして、自分は生きているのだろうか。自分の存在意義は何なのだろうか。このような疑問に、自分の価値に特に敏感になり、ことさらに人に必要にしてもらうことを望み、自分にかけがいのない価値観を見出したくなる時期は思春期なのである。そして、この少女も例外ではなかった。日々の生活において、何ら変わらない日常において、自分の価値を喪失していたのだ。だが、人に自分の価値を求めてもそれでは意味がない。それは良くても悪くても偽りなのだ。他人の価値観と自分の価値観が違うのだから、他人の評価には何ら価値はない。自分こそが、他人と比べるのではなく、自分の中にある価値を自分で見つけることで、自分を本当に評価できるのである。

この少女を悩ませていたのはそれだけではない。思春期の子供はとにかく何にでも影響を受け、それはこの少女も例外ではなく、この少女はとくに少年漫画を好んで読んでおりそこには、当然、読者層を獲得するために人を引き付けるようなストーリーが展開されておりそれは普通に生きている人間が経験するはずのものではなく、つまり、面白いのだ。それを見るたびに少女は自分の現実と比べ、日常に不満を抱き、しかし、いくら望んだとしてもそんなことが現実に起こるはずはなく、だが自分を納得させるのは少し難しく、心のどこかではいつか自分の身にもこのようなありえないことが起こるのだと密かに望んでいた。それは誰もが経験するものであり、大抵の場合、何も起こるはずはなく成長していく内に現実と夢のような世界に折り合いをつけて、もう少したてば漫画の中で起こることを自分と置き換えることはなく、それはそこでのみ存在するものであり、そこでしか存在しえないのだと理解していくはずなのだが…

何故だろう。そんなことを考えていたのが悪かったはずはない。そこには何の因果関係もないだろう。彼女には、彼女が望むことが起きてしまった。そう、彼女は能力者として選ばれてしまったのだ。怪の能力者に。

始まりはいつでも突然であり、なんらかの予兆が仮にあったとしても気づけなければ、結局は同じである。彼女の場合予兆すらなかったのかもしれないが、結果は同じでありならばそんなことを言ったところで無意味である。

ある日曜日の朝。彼女は中学生2年生で確かに受験もこれからあるのだが、それはまだ先のことであり部活もやっておらず昨日もグータラとテレビを見たり漫画を読んだりしているだけで特に疲れるようなことはしていなかったのであるが、まるで日々、仕事に追われる世のサラリーマンやＯＬたちがたまの休みに普段とれない睡眠を十分にとるかのように彼女もまた昼過ぎまで眠っていた。親や兄を呆れさせるほどの睡眠ぷりだったという。そして、まるで計ったかのように、そうでなければ獣のように昼食のいい匂いが彼女の部屋まで届いてくると寝返りを打ち、目を半分くらい開け、上体を起こした。両腕を天井に伸ばし、時計に目をやり時刻を確認。１２時１５分を過ぎていた。普段からも休日はこのくらいの時間に起きているので、特に感想はもらさないが、やはり時間を無駄にしたという感覚があるのか渋い顔を作る。が、その顔もすぐに変化。今の彼女はお腹が空いてしかたがないのだ。パジャマのまま一階に下りていくとリビングのテーブルにはチャーハンと鳥の空揚げが少し前にできたことを自己主張するように湯気を立てていた。顔を綻ばせ、両親に朝の挨拶、すでに昼なのだが彼女の気分的には朝であり、そのためそうなってしまったのだ。兄の姿が見当たらなく、聞いてみるとデートに出かけたようだ。適当に相槌をうって、希は席につき、全員で‘いただきます’という合図とともに食べ始めた。

昼食をこれまた両親を呆れさせるほど食べた彼女は二階に行き、漫画を読んでいたのだがどうにも今日は調子がよくなく、気分転換

と運動を兼ねて外出することにした。赤い校則に則った自転車に跨ると、特に行き先が決まってないのを思い出し、まぁそこら辺をプラプラしようと考えながらペダルを漕ぎ始めた。最初は近くの本屋で新刊が出ていないか確認しようとしていたが、もしそこで本を買ってしまえばその時点で気分転換は即終了となりそれではあまりにもひどいので少し遠いがゲームセンターに行くことにした。

ゲームセンターでこれでもかといわんばかりの勢いでお金のことなどまったく考えずに、レースゲーム、格闘ゲーム、音楽ゲーム、コインゲームを楽しみ、まだまだこれからだったのだがふと財布の中身を確認すると１０００円札が１枚しか残っておらず、‘どうして？’としばらく両替機の前で茫然としていたのだが、自分が使ったのは自明のことでありすぐに後悔の大津波に襲われ急ぎ足でゲームセンターを出るのだった。

まだまだ秋だとばかり思っていたが、外は４時だというのに少し薄暗く、ラフな格好のため寒い。希はまだ後悔の大津波に襲われている真っただ中であり大きなため息を一回つくと悩んでいてもしかたないとすぐに思考を変え、自転車を漕ぎ始めた。自転車を漕ぎながら本屋に向かっていたのだが、この前友達が言っていたことをお金絡みで思いだした現金な希は行き先を変える。彼女が向かったのは、この前友達が気分的にお賽銭をしたい時だったらしく、そのため近くにある錆びれた神社でお賽銭をし、ついでにおこずかいが増えますようにとお願いしたところ、おこずかいアップはなかったのだが親類が用事で家に訪れることがありそこで臨時収入を得たということだった。

希は錆びれた小さい神社の鳥居の前に自転車を止めると、期待感を募らせて、鳥居からわずか２メートル離れたところにある賽銭箱の前に行き、何となく願いが叶いそうな気がしてきて財布から５０円をいそいそと取り出して、投げる。チャリン。という音と共に５０円玉は奥へと落下していった。そして、全力で手を合わせて、希はとにかくお金、お金とつぶやきながらお願いしたのだった。この

時、彼女は目を閉じていてため、気づかなかった。小さな光が彼女の身体に吸い込まれるように消えていくのを。

その日の夜。せっかく本屋にいったのだが、彼女の目当ての新刊は出ておらずそのまますっかり賽銭箱のこともゲームセンターでの後悔と共に記憶の奥底へと消した彼女はシャワーを浴びようと下着を脱いでいる時に気づいた。胸元にある‘怪’という文字に。

これが三瀬希（みせのぞみ）の物語の始まりであった。

それから…

翌日。朝から寝坊をしそうになる希を兄が起こし、起きた希は兄に礼を言うのもそこそこに着替えと歯磨きを済ませてご飯とみそ汁をたとえ時間が迫っていても食べて、それを見る両親たちの呆れる目をひらりとかわして弁当箱を片手に持って今日の授業の教科書をうろ覚えで鞄に詰め込み、凄まじい勢いで家を後にした。

自転車をもうスピードで漕いでいるため身体に当たる風は強く、加えて寒いため彼女の思考は段々と冷静になってきて信号が赤になったところで止まる。腕時計を確認すると、全力で漕いできた甲斐があったのか、余裕とまではいかないが先ほどまでのような全力を出す必要のない時間帯になっていた。結構な距離を全力で走ってきたのだがそこまで息切れしていないことに自分の体力がそこまでついたのかと感心しながら、信号が青に変わったので再びペダルに足を乗せた。

自転車を駐輪場に止めて教室に行くとそのタイミングを見計らったようにチャイムが鳴り、安堵のため息をついて真ん中の列の一番後ろの席に腰を下ろす。前にいた女子生徒、彼女の友達の挨拶に返事をして希は机に突っ伏した。そういう

気分なのだ。
　ホームルームが終わり1限目の英語の授業が始まるやいなや、何と言うことだろう、その先生は手に持っていたプリントを配り始めた。希がそのプリントを受け取る前に先生は黒板に大きな字で今から３０分後の時間を書く。裏面のプリントを意味もわからず受け取り、周りの生徒を見習って黙っていると先生が威勢のいい声で‘始め’と言う。みんなの動きに従いプリントをめくるとそこには小テストと書いてあり、希はしばらくその文字を見つめていたがそんなことをしてもどうにもならずとりあえずシャーペン片手にうんうん唸りながら答えを埋めていき、1限目の英語は最悪の幕開けになった。後日返却されたプリントには４５点と記されていた。
　英語の授業が終わるやいなや前の友達に文句を聞いてもらおうと言うと、どうやら先週に予告されてあったと聞き、記憶を探るがどうにもならずふと教科書の先週授業で習ったページを開くと一番上に希の筆記で‘月曜日小テスト’と該当ページまで綺麗にかいてあり、前日、遊んでいた自分を恨み二日続けて自分を恨むことになっていた。
　2限目、3限目、そして彼女が最も楽しみにしている昼食タイムを迎えてお腹いっぱい食べた彼女は４限目をうつらうつらしながらぼんやりした

頭で授業を受
けていた時だった。彼女の耳に声が届く。
‘おい。お前。暇なら、ちょっと俺の話を聞け’
それまでのぼんやりとしていた頭が一気に覚醒して、希はいきな
り立ち上がり
、
「聞いてます！先生。寝てないです」
と大声で言う。
教室が静まりかえり、板書をしていた先生は振りかえり苦笑を返
す。
「いきなり何だ、おい。それより聞いてないじゃないか。寝ボケ
てんのか」
教室が笑い声で満たされ、よくわからないまま一言二言軽い説教
を受けた希は
顔を赤くしながら着席して、みんなの視線を感じながら前の席の友
達に小声で尋
ねる。
「あのさぁ、先生、私に話聞けとかいってなかった？」
前にいる友達はクスクスと笑いながらやんわりと否定。希は首を
傾げる。と、
また声が聞こえる。
‘面白いなぁ、お前。いやっ、俺も悪かった’
キョロキョロと周りを見るが誰も話しかけていないし、それに聞
き覚えもない
声。心の中で‘誰？’とつぶやく。
‘そうそう。心の中で言えばいいんだよ。俺との意志疎通にはな。
誰って言わ
れても、名前はないから勘弁してくれよ’
希は驚くがとにかく心の中で声なき声を出す。
‘何…何？私の心の中に住んでんの？気持ち悪いんだけど。’

‘気持ち悪いはないだろ…。まぁ、ビビんなよ。そうだな、何て言おうか。当
てはまる言葉があるとすれば一心同体かな。’
希からの声は聞こえてこない。思考が追い付かないのだ。やや遅れて、
‘えーー。やだやだ。出てって、出てって。男の人?兎に角、男でも女でも一
心同体なんてやだー。出てってよう’
‘まぁ、待て。説明してやっから。そうそう。お前、胸の所にある怪って文字
見たか’
今度は非難が混じった口調で返ってくる。
‘む、胸ー。変態。アンタ歳いくつよ!ロリコンなの?訴えるわよ’
両手で自分の胸を隠すポーズをとりながら言う。
‘ん?変態じゃねぇよ。それにロリ…って何だ?まぁ、どうでもいい。とにか
く、胸の所に怪って文字があるだろう。知らないなら、見てみろ’
冷静を装ってるのか、それとも性格からくるものなのかはわからないが落ち着
いた相手の口調に、希も落ち着いてきたのか、‘そういえば…’と
昨日、脱衣所
で見て、石鹸で洗ってもおちずまぁそのうち消えてくだろうとほったらかしにし
ていたことを思い出す。
‘そういえば、あったわね…。…何でアンタが知ってんのよ!見たの!変態!
出てきなさいよ’
‘まぁ、待て。俺はその怪という文字の中にいるって言うか、お前の身体の中

にいるっていうか…落ち着けよ。落ち着いて聞け。まぁ、そんな感じだ’
希はその説明を聞き終え、黙っていたが当然のごとく誰が聞いても理解できる
ものではない。怒りを込めて、
‘はぁ？ふざけてんの？’
と言う。相手は相変わらず冷静な口調。
‘いや、マジだって。そうなんだよ。とりあえず、俺の説明を聞け。絶対に納
得させてやるよ’
相手を信用したわけではなく、むしろ、疑念で一杯なのだが、怪の文字のこと
は気になるし、相手の話を聞いてからいろいろ対処をしようと考えた希は相手に
話す時間を与えてやる。すっかり、授業のことは頭にないようだった。
‘どこから、説明しようか…この怪って文字はすなわち能力のことを表してい
て、今のお前は怪の能力者なんだ。そして、俺はこの怪の能力に取り込まれた…
というかそんな感じだ。能力には他にも種類があって、風、土、闇とかいろいろ
あって、数は把握できない。そんで俺がお前に話しかけているのは、ここから俺
を出してもらおうとおもってだな…’
とりあえずホントのような嘘のようなことを聞いていた希は自分でも気づかな
いうちに楽しくなってきていた。非日常の香りがぷんぷんとするからだ。
‘へぇ、そんなんだ。大変ねぇ。うーん。人助けかー、してあげ

てもいいわよ
。どうすればいいの？それに怪の能力って具体的にどんな力なの？’
‘おお。礼を言うよ。俺がここから出るには、よくわからないが、全ての能力
者をお前が倒してくれればいいんだよ。怪の能力ってのは、簡単に言うと、身体
が丈夫になったり、身体の一部を怪物に変化させたり、まぁ、そんなとこだ’
希はもしかして、と今朝の事を思い出す。全力を出したのに、息が切れてなか
ったのだ。そんなことを思い出しつつ、たった今思いついたことを聞く。
‘ねぇねぇ、頭はよくなんないの？’
期待をして聞いたのだが、答えは無情なものだった。
‘……。努力しろよ’
その答えに納得するが、やはりショックは隠しきれず黙ってしまう希だった。
‘まぁ、それは置いといて…俺もサポートするからよ。頑張ってくれよ’
‘ん？任しといてよ。ところでさ、敵はいつ現れるの？そういえば、何で閉じ
込められての？
‘敵って…いや、まぁ、敵か。そうなんだよ。悪いやつらに閉じ込められてな
。大変なんだよ。もう、２０年くらいこのままなんだ。外の世界に出たいんだよ
。敵はいつ現れるかわかんないなぁ。まぁ、これはゲームみたいなものでさ。全
部集めればいいんだよ。全部集まれば、ゲームクリア。みんなが幸せになるのさ

。負けたやつらも、悪い奴らも、落ち込みはするだろうが、大丈夫。それはそれ
でいいんだよ。悪い奴らも、そういう役を割り振られて俺を閉じ込めた感じで、
とにかくただのゲームだ。巻き込んで、お願いして悪いなぁ’
希は明るい口調で、
‘いいよ、いいよ。楽しそうだもん。それにしても２０年か。大変ね。そうい
えば、優勝すれば私も何か貰えるの？’
期待に満ちた声に相手は二つ返事で望みの答えを返してやる。
‘ああ。俺から礼をさせてもらうよ。絶対にな。約束だ’
‘忘れないでよ！絶対だからね’
と溌剌とした声で希は念を押した。

これから…

ビチャッ、ビチャ、ビチャ。
泥が靴につくのも、撥ねた泥が真っ白な靴下につくのも構わずに希は彼女の延長線上、3メートル先にいる二人を目指して走る。真っ暗な森の中で灯りがないにも関わらず3メートル先を確認できるのは彼女の能力に起因するところだろう。

希は右腕を前に出す。すると、彼女の肘より前の部分が黒く巨大化。そして、伸縮自在のように伸びていく。目の前の敵目掛けて。が、彼女の腕があと少しで二人を捕らえるといったところで、雨が降っていないし、また降ってもいなかったにもかかわらずぬかるんでいる地面に足を捕らわれる。驚きの声をもらすと同時に腕をもとに戻す。彼女が抜け出すことに手間どっていると、前方から空気を切り裂く音。

‘防げ’

心からの声が聞こえたと同時に条件反射のように希は右手をまた黒く巨大に変形させて、自身を守る盾の様にする。一秒でも遅ければそれは彼女の身体に刺さっていただろうが、間一髪難を逃れることに成功した。刺さった部分が冷たい。
彼女の腕に突き刺さっていた氷の矢は、しばらくすると腕に傷だけ

を残し消えた
。それと同時に彼女の変形した腕に残された傷も自然と癒えていく。
‘危なかった…。サンキュー’
希は礼を言いながら、腕を鳥の羽に変える。そして、羽を羽ばたかせることに
よって泥から脱出することに成功した。比較的ぬかるんでいない地面へと降りな
がら二人の位置を確認する。四方に目を配らせるが確認できない。どこかに隠れ
ている可能性が高い。希は気を引き締める。
‘こいつらを倒せば、六個目ね…がんばろっ’
と言いながら、靴に泥が入ってしまったせいで変な感触を足に感じることに気
を取られる。そのため、後ろからの攻撃に反応できなかった。彼女の右胸の辺り
を氷の槍が貫く。
「ふん。油断したな」
そう冷たく言い、槍を引き抜く。希は苦痛の声をもらし、崩れる。
血に染まった氷の槍を左手に持つ男はそのまま希を見下ろす。指輪へと変わる
ことを待っているのだ。が、それが男のミスだった。彼女の服を破り背中から生
えた巨大な黒い腕によって男は胴体を鷲掴みにされる。そして持ち上げられる。
「ぐあっ、なっ、くっ、こ…これは？」
希は首を１８０度回転させる。ありえない角度にもかかわらず、彼女の表情は笑っ
ている。そして、そのまま話しだす。
「油断してんじゃないわよ。怪の能力を甘くみないことね」
希は彼を捕らえている腕に一層の力を込める。男の悲鳴がもれる。

が、それは
男の本能から来るものだろう、腕に掴まれていなかった左腕の氷の槍を消す。そして、何ももたない左腕の掌を彼を掴んでいる黒い腕の手首に当てる。瞬間、腕は氷漬けにされ、粉々に。　男は地面へと両足をつけ荒く呼吸をする。
希は顔を正面へと向け、立ち上がり男と対峙する。　男はうすら笑いを浮かべながら、
「なぁ、おい、クソガキ。ビースト・フォームって知ってっか。知んなかったらお気の毒。まぁ、よーく見とけよ」
と言う。そして、勝ち誇った笑みを浮かべながら四つん這いになる。
希に心からの声が聞こえる。
‘させるな！一気にたたみかけろ！’
希は声に従うように右手を前に出し、黒く巨大化。そして、男を握りつぶそうとするが…泥に足を取られバランスを崩してしまう。巨大化した手はあらぬ方向にいき、木々をなぎ倒す。
「何よ、これー」
希の抗議の声に答えるように、声がどこからか聞こえてくる。
「悪いが、怜（れい）の邪魔はさせないよ。彼にやられてくれよ」
「はぁ？ふざけ…あっあああー」
希の絶叫。彼女の黒く巨大化した腕がなくなっている。肘より先がない。周りには氷。そして、そこには氷でできているように透き通った一匹の狐。希の腕は

再生を開始する。狐は右足を上げ、ゆっくりと降り降ろす。すると、ぬかるんだ
地面から氷でできた無数の槍が生える。希の全身を、足を、胴体を、腕を貫く。
氷の槍に貫かれたまま空中にいる希はすでに声もでず、ただぐったりしているだ
けだ。ときどき、かすれた呼吸音が聞こえる。
氷の狐は口を開いたまま、
「ふん。クソガキ。残念だったな。だが、ここまでだ」
と希を見ながらつぶやく。そして、尻尾を上に立てる。伸びた尻尾は希の胴体
へと。その透き通った尻尾は…最高級の刃物であるかのように、決してどんな刃
物であろうとそんなことはできないのであるが、一瞬で彼女の上半身と下半身を
切り離した。氷の矢が消え、支えを失った希の身体がゴロンゴロンと音を立て、
落ちる。
指輪には…変わらない。　不審に思った怜が更なる止めをさそうとした瞬間、
希の黒く巨大化した両腕が氷の狐の胴体を捕らえる。怜は咄嗟に氷の力でその両
腕を氷にし、粉々に。怜を恐怖が襲う。希はまだ生きている。動いている。うつ
ぶせで横たわったままの望みの胴体から下半身が再生する。ズボンも下着も身に
つけていない新たな下半身。目を移すと、先ほどの下半身があったところにはズ
ボンしか確認できない。希の首が動く。怜と目が合う。恐怖が頭を支配。怜は本

能で動いた。すぐに１８０度回転し、
「千（せん）！一旦、引くぞ」
と独り言のように言うと、闇に姿を消した。
取り残された希はうつぶせのまま、泥服を身につけていない身体に張り付いて
くるのを気持ち悪がっていた。
「うう…気持ち悪いな。それよりも、お尻見られちゃった…どうしよう…」
半泣きのまま、そんなことを呟く。それは心の声にもなっていたのか、
‘まぁ、助かったからいいじゃねぇか。それにしても、ビースト・フォームか
…’
と、なにやら考え事をしているように呟く。
希は自衛隊のほふく前進さながら、腕だけを動かしズボンが置いてあるところ
へと移動する。
それを示すのが心の声にもなっていたのか、
‘何やってんだ…立っていけばいいじゃねぇか’
と。
‘はぁ？何言ってんのよ。私今、下は何も履いてないのよ！’
心底怒ったように抗議をする。
‘誰も見てないだろ…’という呆れた声に、
‘そんなのわっかんないでしょ！勝手なこと言わないでよ！’
ズボンのもとにたどり着いた希はそれを握り、草むらへとまたほふく前進で進
んでいった。
帰宅する前に草むらに放っておいた鞄から新たな上下の下着と上着、ズボンへ

と着替え、希は警戒心をとくことなく自転車へと跨った。希が鞄に着替えの服装
を入れていたのは以前、能力者との戦いによって服を破いてしまい、かなり苦労
したことからくるものであった。それがなくとも、現在の時刻が１１時を過ぎて
いることから希が両親に怒られることになるのは決定しているが。
　帰路ではどう言い訳しようかと考えることに終始していたのだが、どうもいい
案が浮かばず仕方ないので遊んでいたというと案の定怒られ彼女の一日の原動力
であり一日のうちでもっとも楽しみにしている時間の一つである晩御飯抜きとい
う彼女にとっては何よりも耐えがたい身体的苦痛を味あわされ、しかし、ここで
反論をすると彼女の量刑がさらに厳しいものになるであろうことはわかりきった
ことであるからこういうことに関しては賢明な彼女はひたすら謝ることによって
何とか明日の朝飯と弁当抜きという重い罰を負わずにすんだ。次の日の弁当のお
かずはどう考えても普段よりボリュームがなかったが…。

　シャワーを浴びパジャマに着替えベッドに入った彼女は抱いていた疑問を聞く
。
‘ねぇ、ビースト・フォームって何？そういえば、今までにも言ってた奴いた
けど、アンタが言うからみんな言った直後にやっちゃったからさ’
　すぐに答えが返ってくる。

‘ビースト・フォームってのは、具体的に、つまり、触れたりとかなんだが、
そういう形を持っている能力のみが使えるものさ。簡単に言うと、今日の氷は形
を持っているが闇とかはない。だから、闇にはビースト・フォームはないが、氷
にはあるんだよ。ちなみにだが、ビースト・フォームは精神力の消費が激しいか
ら、注意しなければいけないがな’
希は‘ふーん’と聞いておきながらどうでもいいような返事をする。
‘んで、私はビースト・フォームできるの？’
‘ああ、一応漠然としてるが、形は持ってるからな。怪物ってのはその人間の
イメージによって形は違うが、あることには違いない。もとはといえば、夜に見
た木が人間のイメージによって怪物として恐怖の対象になる。それが具現化され
たのが、怪物だ。つまり、現実に存在するんだよ’
またも希は‘ふーん’と興味なさそうな返事をする。
‘じゃあ、今まで倒した‘土’とか‘鉈’とかは変身できるけど、ほかのやつ
はできなかったってわけね’
‘ああ、その定義であっている’
‘ふーん’とどうでもよさそうに返す希。
‘なぁ、お前さっきからふーんばっか言ってるけど真面目に聞いてるよな？他
に感想ないのか？’
‘だってー、お腹すいてんだもん。仕方ないじゃん。つーか、もう寝る’

と勝手に話を切り上げると寝てしまった。
‘おい！こら！あの二人のこととかあんだろ！返事しろ！’
‘ぐー、ぐー’
‘起きてんだろ、てめぇ！おい’
二日後、希は再び彼らと会うことになった。昼間の学校で。そして、それが彼
女が始めて自分の落ち行く運命に気づいた時だった。

いまから…

二日後。朝から太陽は今も空一面を我が物顔で支配している雲に隠されたため
、その上でさんさんと輝く太陽もなすすべがないまま迎えた昼の時間帯、希の学
校へと二人の青年、怜と千が足を踏み入れた。誰にも招かれることなく。ただ、
誰もが楽しみな昼食という時間を壊すためだけに。

「ふふっ、んふふふ」
友達数人と机をくっつけ合い彼女たちは昼食の時間を楽しんでいた。希の反省
しきった態度が功を奏したのか、弁当のボリュームは以前のものに戻っており、
しかも今日は希の大好物であるからあげも入っていた。そのため、ご機嫌なので
ある。
「希ちゃん、涎でてるよ…」
言いながら、弁当を取りにいっていた女生徒が席に着く。
「希ちゃん、お弁当の時間が一番活き活きしてるもんね」
希の隣に座っている女生徒の的確なコメントに一同は笑ってしまう。
希はほっぺを膨らませて抗議の意思を示すが、みんなはその様子を見て‘可愛
い‐’と感想をもらすだけで全然、抗議になっていない。
希はそんなことよりも、という感じで手を合わせる。みんなも、はいはいとい
った半ば呆れた感じで手を合わせ、

「いただきまーす」
少女たちの声は見事にそろった。そんな微笑ましい昼の時間帯だった。

グラウンドを我が物顔で進む怜と千に気づいたのは４限目に体育の授業をし、
その後片付けを任されていた男子と女子の体育員だった。そして、二人の片づけ
を確認する役割を担っていた体育教師だった。体育倉庫から出てきて教師に片づ
けの終了を告げようとしていた男子生徒の視界に怜と千が入り、何となく疑問に
思ったその男子生徒はグラウンドの真ん中を歩いていく二人に指を指し教師に尋
ねる。
「先生、あの人たち誰なんです？今日、何かあるんですか？」
体育倉庫の片づけの様子を見ていた体育教師は振り向いて確認する。黒い上下
のスーツを着た二人組が学校へと向かっていた。朝の連絡でそんなことを聞かさ
れていなかった男子教師は二人の体育委員にＯＫのサインをだし、確認のため二人
のところに向かった。
「あの、すいませんが、どちらさまです？」
歩きながら話しかける。二人は無言で進んで行く。止まる気配がないと考えた
体育教師は二人の行く手を遮るように前にでて身分の提示を求める。
「すいませんが、身分の方を確認させてもらってもよろしいですか？」
右側にいた怜が進み出て、そして、教師の右肩に軽く手を置いた。

その瞬間、
教師の身体は氷漬けになる。
「ふん」
怜は氷漬けになった教師を無視して進んでいく。
二人と教師のやり取りを遠巻きながら体育倉庫から見ていた二人の生徒は先生
の異変に気付き、二人の視界に入らないように注意しながら教師の方へと進んだ
。教師は氷漬けになっており、辺りはまだ冷たい。女生徒の方が叫ぶ。
「先生、先生。先生！」
その声は窓を開けていた教室にいる生徒の注意を引いた。何人かの生徒が教室
から顔を出し、叫ぶ女生徒の方を見る。が、何がどうなっているのか把握できず
、ある男子生徒が大声で聞く。
「おーい。どうしたー？」
その声はおおよそ緊張感を含んだものではなかった。叫ぶ女生徒の隣にいる男
子生徒が応じる。
「先生がっ、今学校に入っていこうとしてる奴に氷漬けにされたんだよっ」
それを聞いた生徒たちが玄関の方に視線を移すと、校舎に足を踏み入れた二人
の男の頭があった。
男たちは土足に構うことなく、ズンズンと廊下を進んで行き二階の職員室のド
アを勢いよく開けた。
中は昼食を取っている先生や先の授業の疑問を聞きに来ている生

徒たちでにぎ
やかだった。
入り口の近くにいた男性教師が足元を見てくってかかる。
「おい、お前ら。靴を脱げ。何の…」
怜に肩を掴まれた男性教師は体育教師と同様に一瞬で氷漬けにされてしまう。
見ていた教師、生徒は悲鳴をあげ、逃げようとするがドア、窓を氷漬けにされて
しまう。そして、次の瞬間にはそこにいた教師、生徒までも氷漬けに。
「おい、怜。やりすぎだろ」
千の文句も聞かず、怜はマイクのもとに。そして、慣れた手つきで操作してい
く。

昼食をいち早く食べ終わった希は一部の生徒が騒いでいる理由を確かめようと
もせずに、友達の弁当を物色しては「おいしそー」、「ねぇ、一つちょーだい」
と、かつあげのような行為をしていた。
そんな時、突然放送がかかる。
「この前の‘怪’の能力者。二日前にお前と戦った‘氷’と‘泥’の能力者だ
。今からここであの続きをしようじゃないか。
グラウンドに降りてこい。決着をつけよう。お前に拒否権はない。
お前が来なきゃ、ここの生徒、教師が犠牲になるぞ！いいな」
希の心拍数が上がる。同時に心の声も聞こえる。
‘どうやら、あいつらがここに乗り込んできたらしいな…どうする？’

迷いなく希は答える。
‘決まってんじゃん！さっさと終わらせる！ここで暴れてもあいつら仕留めれ
ばみんなの記憶には残らないし’
椅子から立ちあがった希は前の席の友達の卵焼きを手でつまみあげるとパクッ
と口にいれ、そのまま窓の方に向かって走った。助走は全然というほどなかった
が、見事な運動神経で開いていた窓の淵に両足を乗せると足を少し折り曲げ高く
ジャンプ。その行動と変形した窓の淵、ひび割れたガラス窓に呆気にとられるク
ラスメイトたちに構うことなく、グラウンドへと着地した。
グラウンドには氷漬けにされた体育教師、叫ぶ女生徒がいた。男子生徒は職員
室に助けを呼びに行っていた。
グラウンドに着いた希は氷漬けにされた教師と女生徒のところに行く。すぐに
一昨日の奴の仕業とわかる。
‘ねぇ、何とかならない？’
‘能力者をやればなんとかなるだろが…’
おそらくそういう答えが返ってくるだろうと考えていた希は‘そう’と返すだ
けでそれ以上は何も言わない。
そして、周りを見回す。誰もいない。
「あっれー？おっかしいな？待ってるっていってたのに誰もいないぞ？」
緊張感がまるで感じられない声で希が言う。
バリン！
何かが割れる音が響く。希が音がした方に顔を向けると、職員室

の窓ガラスが
二枚割れていた。彼女以外の視線は割れた窓ガラスや落下する破片に向けられて
いたのだが、彼女の目だけは違うものに注がれていた。
希が臨戦態勢をとると同時にそれは彼女の前に現れた。
まだ、記憶に鮮明に残っているそれが口を開く。
「よぉ、また会ったな」　日差しに照らされた氷の狐はあの時よりも一層透き
通って見える。
「遅いじゃん。呼び出した割りに。ま、いいけど。そんなことより、先生をも
とに戻してくれる？」
親指で後ろで氷漬けになっている体育教師を指す。目はそらさない。臨戦態勢
も崩さない。
「ふん。俺に勝ったら…勝手にどうにかなるだろうよ」
言い終わると同時に希が動く。右手を黒く巨大化。その腕が怜に襲いかかるが
、怜はヒラリとかわし、希の懐へ。が、右肘の部分から生えた黒く大きな腕に胴
体を掴まれる。完璧な不意打ちで怜に防ぐ手段はなかった。そのまま希は握りつ
ぶそうとするが、途中で力が入れられなくなる。気づいた時には、右肘から生え
た腕は根元から狐の尻尾によって切り落とされていた。
「つっっっ！！」
希は苦痛に歪む声をもらす。本当は叫びたいほどの痛さだったが、そんなこと
で隙を作るわけにはいかなかった。そんな彼女の変わりに校舎から見ていた希の

友達、他学年の女子、そして、氷漬けにされた体育教師と共に近くで一連の出来事を見ていた女子が叫び声をあげる。
希や怜にはその声は届かない。彼らの五感は互いにのみ向けられている。
再び、希に激痛がはしる。右肘から先が狐の尻尾に切り落とされていた。苦痛に顔を歪めながらも、希は向かってくる怜に合わせて黒く巨大化した左手で怜のわき腹に拳を叩きこんだ。　奇妙な声をもらし、怜は吹っ飛ばされる。怜の身体は斜め横のまま一直線に、その延長線上に位置する体育倉庫へと突っ込んでいった。コンクリートとコンクリートがぶつかったような音がして、体育倉庫の横の壁が崩れ去った。
希はじっとその方向を見ている。深追いはしない。しばらくすると、怜が姿を現す。見る限り、ダメージはなさそうだ。その様子を見て、希は忌々しそうに呟く。
「タフなやつ…」
再生した右手を左手と同じように黒く、巨大化させる。そして、両膝を曲げ、身体を丸める。顔は真っ直ぐ怜の方に。その態勢のまま、怜に突っ込もうと思いっきり右足を一歩前に出すのだが…ドロッとした感触が両膝を包み込み、勢いを削がれてしまう。‘何？’と自身の足を見ると、泥でできた人差し指と中指のよ

うなものが膝の辺りに。そして、太もも辺りには親指みたいなものがあり、三つ
の指で希の両足を包んでいた。希は逃れようとあがくが、うまく身動きがとれな
い。
「な、なにこれ！？ちょっっ」
泥のいやな感触が伝わってくる。と、我に返ったように、希は怜の方を見る。
怜の周りには無数の氷の矢。認識したと同時にそれらが、希に向かって飛んでく
る。咄嗟に、両手をクロスさせガード。氷の矢は希の両腕を貫くことはなかった
。が、つかの間の安心だった。ひんやりとした空気を感じた時には、怜の尻尾に
よって彼女の体は心臓の少し下あたりで真っ二つに切られ、支えを失った上半身
は前に落ちていた。自分の視線が段々と下に向かっているのを希は感じていた。
やがて、泥に顔をぶつけ、そのまま顔から地面にぶつかった。
直後、遠くで誰かの叫び声が聞こえた。

ここから…

希は横たわっていた。
上半身のみの姿で。
彼女の残された下半身は泥の指に支えられたまま、しばらくその不気味さを醸し出していたが、やがて消滅しだす。
そして、それと呼応するように心臓より下のない希の上半身に、存在しない部分が現れてきた。その光景は言葉ではあらわせないような不気味なものだった。
「本当に、怪物だな…」
だんだんと再生される希の身体を見ていた怜は、ただ頭に思い浮かんできた言葉をそのまま口にだした。希の身体は一分もかからないうちに元の姿に。ただ、再生した部分は服をみにつけていないが…。希の身体が、一瞬で変化する。全身が、ドス黒く。怜が希の身体の変化に気づいた時、先ほどまで横たわっていた希の姿はそこにはなかった。怜の背後に、希はいた。ただ、突っ立ったまま。何もせずに。怜が振り向くと、希は首をコキコキと鳴らす。
「ふう。あーあ、やってくれたね。もう。制服高いのにな」
残念そうに、呟く。
「その姿は…。ビースト・フォーム…か？」
「ん？違う、違う。私、ビースト・フォームになんてなれないし。さて、終わらそっか」
あきらかに今までと雰囲気の違う希に怜は構える。その判断は正しかった。正しかったが、どうにもできなかった。
一発。黒く巨大化した拳を顎に叩きこまれる。
怜には確認できなかった。何が起こったのか。何が起こったのかわかった生徒や千でさえ、上空に吹っ飛ばされた怜の下に右拳を上に上げたまま立っている希を見たことと、首が目いっぱい上を向いている怜の状態から推測したのだった。そのまま、弧を描いて、希

の位置からかなり離れたところに怜は背中から地面に落ちた。指輪にはならない。しかし、動きもしない。
生徒たちが怜から希に視線を移した時、そこに希の姿はなかった。視線を移すと、希は怜の手前で右半分の身体を泥でできた掌に埋めていた。
「ん、あ？なにこれ」
もがくが、身動きがとれない。
地面から手首が生えていたそれは段々と姿を現してくる。手首から、腕。腕から肩。そして、泥でできた不細工な顔。もう一方の手もあらわれ、それは希の左半身を包むようにして、さらに希の自由を奪った。大きく、がっしりとした図体。それをささえる二本の足。それが完全な姿を現す。５メートルはあろう巨体。泥でできた怪物が姿を現した。
「このやろ、離せっ。ちっ。こうなりゃ」
希は両腕をさらに巨大化させる。泥の手をぶち破り、指を地面に突き立て、力を加え、その力によって強引に泥の手から抜け出す。身体は泥まみれだった。
「何だこりゃ？」
希は始めて自分を捕まえていた泥の手の持ち主の姿を目にする。
「ビースト・フォームか？また、めんどい」
左指を地面に突き立て、右手を大きく振りかぶる。足腰にさらなる力を入れ、振りかぶった右手を泥の怪物の右わき腹に。開いた手は泥の怪物の腹をえぐり取る。‘え？’こんなことになるとは思ってなかった希は素っ頓狂な声を上げる。泥の怪物は腹をえぐられたことでバランスを崩すが、すぐに周りの泥が集まり再生する。希の右手には大量の泥がついていた。
「どーなってんの？」
‘おそらく、これはビースト・フォームじゃないな…。こいつは見た目にはダメージをうけたが、どうやら全然平気のようだ。ビースト・フォームは、再生できるが、必ずダメージは蓄積される。さ

っきの氷のやつみたいにな。今のお前にやられて、まだ向かってくるような奴はそうはいない。仮にこいつがそうだとしても、そんな力があるのなら、前回にこっちがやられてたはずだしな。こいつは、ビースト・シンボルだろな’

‘ビースト・シンボル？’

耳慣れない単語に希が聞き返す。

‘ああ。ビースト・シンボルは同じく、ビースト・フォームが使える能力者だけが使える能力で、主に援護担当みたいなものだ。その能力の性質を宿したもの、泥なら泥、土なら土に簡単な模様を描くんだ。そして、そこにそいつの血を加えてやれば完成だ。問題はこれみたいに完成するまでに時間がかかるってとこだな’

のろのろと泥の怪物は距離を縮めてくる。が、移動速度がかなり遅いため、移動する希に追いつかず、いつまでたっても距離は縮まぬばかりか簡単に希に背後に回られてしまった。

‘つーか、そういうのこの前のビースト・フォームの時に一緒に言ってよ。で、どうすりゃいいの？’

まったく悪気のない声で声の主は攻略法を言う。

‘どこかに模様があるはずだ、それを壊せばビースト・シンボルは消滅する。それか、能力者を殺すかのどっちかだ’

「ふーん。まぁ、後者の方が楽だけど、泥のやつがどこにいるかわかんないし…模様でも探すか」

足、腕、頭、背中と見渡すが紋章のようなものは見当たらない。仕方なく、正面に回ろうとしたその時だった。希の腕に凄まじい圧力がかかる。

「くっ、ああっ」

希の右腕に怜が噛みついたのだ。二か所に圧力がかかる。反射的に希は腕を巨大化。噛みつけなくなった怜は距離を取る。再び、対峙する。すでに戦闘不能と判断していた怜は、一部を変化させてそこにいた。凄まじい殺気を放ち。先ほどとは違い、その狐には頭が二つある。双頭の狐へと変化していた。

「あのくらいで終わったと思ってんじゃねえぞ。さっさと止めをささなかったことを後悔させてやるよ」
‘後悔させてやるもなにも、もうすでに後悔してるっつうの。たく、思いっきり噛みつきやがって’そう思いながら噛みつかれた部分を見るとすでに再生していた。
希は一歩踏み出す。ズブズブ。変な感触に足元を見ると、希の足元は泥と化していた。気づけば、左足も。段々と泥は上がってきて、希を飲み込もうとする。希は手を巨大化させて、土の部分に触れようとするが、そこも泥と化す。完全に身動きを封じられた。体育倉庫が怜の背後に見える。だが、そこに手を伸ばしたところで、怜にやられるだろう。左手には校舎。こちらも同じ目にあうだろうし、もしかしたらもっと最悪なことになるかもしれない。みんなを巻き込んでしまうかもしれない。後ろを見る。泥の怪物の姿がないことから、どうやらこの泥自体が泥の怪物であろうと推測できる。氷漬けになった体育教師はそのまま。女生徒はの姿はなかった。段々と泥は上がってきており、腰回りにまで達した。もしかしたら。このまま全身を覆い、窒息させる気かもしれない。あれこれ挽回の策を希が考えていると、怜が薄気味悪い声で話す。
「お前は、何で戦っているんだ？目的があるんだろう？望みのが叶うことはしってるよな？」
希は何も言わないが、怜は喋り続ける。
「俺には目的があるんだよ。俺はな、昔、小学校で教師をしていた。昔と言ってもたかが二年前のことだがな…それでな、その時、俺はすでに能力者だった。千の奴も同じ教師で同じ能力者だった」
ガララ。ガララ。と、窓が次々にしまっていく音が聞こえる。
「そんな時だった。俺らの小学校にな、どういうわけで俺たちが能力者とバレたのか知らないが、その時の俺たちは能力の存在は知っていても、能力を人前で使ったことはなかったし、まして、それで他人に危害を加えようなんて考えもしなかったから…俺たちを殺すために能力者が来たんだよ。そいつは無茶苦茶なやつでな、校舎

を破壊して、生徒を傷つけ、俺たちは戦ったよ。生徒を守りたかった。俺たちが死ねば、それで済んだのかもしれなかったが、頭に血が上ってた俺はそんなこと考えもしなかった。…気づけばな、そこは血の海だった。おれは生徒の首に噛みついていた。俺はいつの間にか、ビースト・フォームになっていて、俺の自我はなくなっていて…当然、その能力者は殺したがな。それから、俺たちは決めたんだよ。もう一度、生徒たちを蘇らせることを…」

希は何も言わない。怜も聞いて欲しくて話しているのではなく、むしろ、己の罪をここで償っているようだった。贖罪のつもりかもしれない。

「だからな、ここで殺されてくれよ」

一気に怜の声色が変わる。周りの様子がおかしいことに気づく。泥はカチコチに固まっていた。花壇も、校舎の窓も、目でわかるくらい固まっている。いつの間にか、周りの温度が氷点下に突入していたのだ。幸か不幸か、希は身体を強化していたためそれに気付かなかった。このタイミングで話しだしたのは、これのためだったのだ。希たちの教室を見上げる。生徒たちは窓の近くにはおらず、奥で凍えているのかもしれない。いらだちからか、希は歯をおもいっきり食いしばる。

「上を見てみな」

希は言われた通り、上を見る。そこには無数の氷でできた槍が、その鋭い先を下に向けていた。グラウンドだけでなく、校舎の上にも。希の顔色が一変する。

「やめろ！みんなは巻き込まないで…」

「巻き込むつもりはないさ。お前が殺されればな。さぁ、言え。どうすれば、お前は死ぬ？」

「……」

希は何も言わない。

怜は一歩、また一歩踏み出す。と、怜はいきなりバランスを崩す。それは一舜のことだった。怜はなんとか、踏みとどまることができ

たが、その一瞬、槍を制御できなかった。全ての槍は怜の精神力が制御していた。ビースト・フォームに加え、無数の槍。怜の精神力は限界だったのだ。怜が気づいた時、二つの槍はすでに校舎に向かって落ちていた。怜には止めることはできなかった。その二つに精神力を集中することで、今度はほかの槍のバランスが崩れてしまうからだ。理由はどうあれ、この時の怜の思考は完全に停止していたため理由などなくとも不可能だったのだが。怜につられて、希も見る。希に防ぐ術はなかった。ただ、槍が校舎に向かって落ちるのを見ていただけだった。槍は屋上を突き抜け、その先は、三階の教室にいた男子生徒の背中を貫いた。生徒の叫び声を耳にし、希はその教室を見る。窓には血が飛び散っていた。

希の意識はそこでブラックアウトした。

あれから…

希の意識が戻った時、彼女は裸のままその場に座り込んでいた。
辺りには砂ぼこりがたちこめる。
人の泣き叫ぶ声。
遠くでサイレンが聞こえる。
辺り一面に飛び散っている血。
希は精一杯、声を出そうとするが何も言えない。言いたいことはあるが、言えない。涙が、溢れる。それだけ。声を出して泣きたいが、肝心の声はでない。
崩れた校舎。
破片となった窓。
つぶれた机。
認識はできる。
ただ、理解はできない。
眩暈が希を襲う。
うまく、呼吸できない。
「あっっ」
微かに声が漏れる。
「うっっ…んん」
声が出る。だが、うまくはでない。
振り絞る。現実を確認するために。現実に取り残されないために。
「何…で。こんな、ことに。どうして、こんなことに…っ」
希は彼女の中学校がすでに瓦礫となってあちこちに散らばっているのをそれを認めたくないというのを表情と声で表現した。それが、精一杯だった。
声が聞こえる。
‘希…お前がやったんだよ。右手を見てみろ’
その声に従うように、希は握り締めていた右手を見る。そして、

ゆっくりと開いてみる。そこには‘泥’、‘氷’、‘気’、‘刀’と描かれた指輪があった。
何にも思いだせない。指輪を見ても何も感じない。
‘お前が…その二人を握りつぶしたんだよ。ビースト・フォームになって…。そして、制御できずに暴れて…学校も、この街も。仕方がなかった…では納得できないと思うが、仕方がなかったんだよ。誰にも止めれなかった’
希は理解できない。周りを見渡す。
曲った電柱。
壊れた家。
走り回る人たち。
なにもかも、理解できない。
‘誰がやったの？’
‘お前だよ’
‘どうして、私が？’
‘みんなを守るために…’
‘私は…みんなを守れたの？’
‘……’
‘ねぇ、私はこれからどうすればいいの？’
‘全ての…全ての能力者を倒せば…もう一度…やり直せるかも’
‘全ての…’
希は右手にある二つの指輪を見る。
‘そう…ね。そう。そう。全ての能力者を倒せば…みんな、幸せに…。みんな。美香子も彩も千佳もまゆりんもえりちゃんもきゅーたも町田もみずほも曽山もみんな、みんなみんな…お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、みんなみんなみんな。私も、あんたもみんなみんなみんな’
「みんな、幸せになるの」
希はかすれる声でそう言った。それしか、言えなかった。
‘これで…完璧だ’

心の声の主はそう言った。その声は希には届かなかった。

希が決意をしてからすでに7年が経とうとしていた。彼女は全てをやり直すために何もかもを捨てた。家も家族も友達も何もかも。あの場から彼女は人知れず姿を消し、ただ他の能力者を殺すことのみを考えた。彼女の時間は止まっているのだ。今の彼女がしていることは、彼女の人生の時間には関係のないことだと、彼女自身は考えていた。いわば、これは、ゲームみたいなものでこれを済ませれば現実の時間に戻れると彼女は考えていた。それは彼女なりの処世術だった。

あれから7年。彼女が殺してきた能力者の数はすでに５０を超えていた。集めた指輪の数は１３０以上。だが、正確には指輪の数はどのくらいあるかわからない。気の遠くなるようなことを彼女はしていたが、彼女は決して諦めなかった。心身ともに成長して彼女も２３歳。２３歳といえば、いろいろと出会いも別れもあり、友達とも付き合い、でも仕事もあり、それでもいろいろなことを経験してと充実した人生を歩んでいるはずだったが、彼女にはそんな記憶も経験もなかった。これから、経験するのだ。やり直すのだ。いつもそう言い聞かせ、それを疑わなかった。

目の前の能力者を右手で握りつぶす。

指輪を見る。４つ。

ポケットにしまい彼女はまた走りだした。彼女の望む現実のため。それを夢にしておきたくはないから。

彼女は今の現実を現実と認識していない。これはゲームだと考えている。しかし、夢は現実からしか生まれない。なら、ゲームから生まれた夢は…非現実から生まれた夢の結末はどのようなものだろうか。非現実を現実と認識するか、夢を諦めるか、はたまたそれ以外の結末がそこに存在するのだろうか。現実が夢から生まれるのは、もとは夢はその現実の一部だからだ。非現実から生まれた夢は非現実で叶うのか？もし、そうならば、誰がそれを叶えるのか？非現実

の存在がそれを叶えるのならばその夢はやはり非現実の中で叶い、その非現実が叶ったところで果たして喜ぶものはいるのだろうか。
現実を非現実に、非現実を現実に置き換えることは可能である。それは認識するものに委ねられている。普通、その基準は認識するものに委ねられれいるのであるが、人は全てを自分で決めることはできない、しようとしない。他人にそれを委ねる時があり、疑いもなくそれを受け入れる時がある。現在の彼女は他人の価値観を受け入れているのではなく、自分の価値観を積極的に作っているのだ。そして、それが正しいかどうかを知るすべはない。いや、もともと何が現実で何が夢なのかを知る術は誰ももっていない。ただ、人は自分が支持したいものを支持しているにすぎない。それはそれでいい。現実と夢とは実にあいまいなものなのだ。彼女がどんな結末を迎えようと、現実と非現実の逆転を知ろうと、どちらも非現実だということを知ろうと、どちらも現実だということを知ろうと彼女は彼女のしたいようにするであろう。それが人というものだ。

彼女が最後に能力者を殺してからすでに一カ月。新たな能力者はなかなか見つからなかった。だが、彼女は焦らなかった。そんなことは今までにも何度もあったことだったからだ。
彼女は朝食を買いに近くにあったコンビニになにげなく入り、適当に目につくパンを二つとお茶のペットボトルを手に取りレジに向かった時だった。突然、辺りが明るくなり、その光は彼女の視力を奪った。彼女にはなすすべはなかった。
彼女の視力が再び戻った時、彼女は目を疑った。目の前には地球。自分のいるところは真っ暗。まるでそこは宇宙のようだった。
‘どうなってるの？’
彼女は臨戦態勢を取りながら話しかける。
‘これは…おそらく、いや、いよいよだな。お前以外の能力者がいなくなったってことだろう。お前は生き残ったんだよ’
‘ホントに！’

何が起こるのかと、彼女がキョロキョロしていると、遠いところに一点だけ白くなっている部分を見つける。じっとそれを見ているとそこと重なっている周りの部分も段々と白く、そしてそれは段々と広がってくる。希は足元に来て驚いて飛びのいてしまうが、彼女には影響はなかった。彼女の見ている前で地球も白くなり、跡かたもなくなる。この一連の光景は、まるで絵が描かれているパズルが段々と裏返しにされていくようだった。真っ白になった空間に希はたたずんでいた。

‘何？今の…’

とりあえず、希は尋ねてみる。

‘…。俺にもわからん’

まだ何か起こるのではないかと希がキョロキョロしていると、目の前に大きな文字が浮かび上がってくる。それは大きすぎて、逆にわかりづらく、理解力を助けるために咄嗟に希は口にだして読み上げた。文字は全てひらがなだった。

「あ・な・た・の…の・ぞ・み・は・な・に？」

ご丁寧に？マークまであった。

「あなたののぞみはなに！」

希は大きな声で復唱する。表情はこれまでの7年間で見せたことのない、嬉々としたものだった。

‘やった！ねえ、ついに叶うのよね’

‘ああ、そうだな’

そう言った心の声もいままでのものと明らかに違った。

希は呼吸を整えて、ゆっくりと両手の掌を合わせた。そして、さきほど文字が浮かび上がったところを見つめる。

「お願い…みんなを」

‘俺をもとの姿に戻してくれ！’

気がつくとそこはもとのコンビニだった。右手にパンを二つ、左手にペットボトルを持ったまま希は立ちつくしていた。コンビニに

流れている曲もひんやりとした心地よい冷房もなにもかも彼女の記憶通りだった。ただ彼女の前に立つ袴をきた見知らぬ男性を除いては。

‘あっ’と小さい声を出して希は右によった。自分が通行の邪魔をしていると思っての行動だったがその男性の目は希に固定されたままだった。

見つめあう二人。

希がなんだか言いようのない不安にかられ、さっさとレジに行こうとした時、その男性が彼女の次の行動を読んだかのようなタイミングで口を開く。

「よお！」

片手を上げてまるで久しぶりにあった旧友のような感じで希に話しかける。見覚えはなかった。だが、希は声を聞いた時その人物が誰だかわかった。その人物が誰かを。

あとから…

驚きで声がでないというのを彼女が経験したのはこれで二度目だった。一度目は知らず知らずの内にビースト・フォームになり意識が戻った時に見た最悪の光景の時、そして、これが二度目だった。希は顔が緩むのを感じた。同時に視界がぼやけて頬を生温かい液体が一筋流れた。

「おいおい…泣きながら笑うなんて器用なやつだな。いや、笑いながら泣いてるのか？」

男はあきれた口調で言う。

希は涙を拭おうともせず反論する。

「ん、どっちだっで…同じだよぉ」

先ほどの涙を皮切りに次々と涙が流れてきたが、希にはそれを止めることはできなかったしまた止める気もなかった。嬉しい時にも涙が出るということを希はこの時初めて知った。泣いて笑って同時に二つの感情を出せることを。あの時以来、泣いたり笑ったり怒ったりとそういう感情を一切出してこなかった反動なのかもしれなかった。

珍しそうに希の顔を見ていた男は薄笑いを浮かべて視線をチラと右に移した。視線の先にはおにぎりや弁当がたくさん並べられている棚があり男は‘ほう’と感嘆の声をもらしておにぎりを一つ手にとった。

バリバリと無造作にやぶる音に希が気づいた時、男は海苔をうまくつけることができなかったのかおにぎりを手づかみでそのまま食べていた。希の顔が一気に驚きに変わる。

「んー。まぁ悪くないなぁ。てか、べたべたすんな！」

とおにぎりを掴んでいた掌を希にみせた。

「ちょっ、ちょっと何してるの」

希は焦っておろおろとしてしまう。と、カウンター越しに若い男

性店員が異変を感じとったのかこちらに来るのが目に入った。そんな希の焦りを微塵も感じないのか男はなおもマイペースで手をおにぎりの棚に伸ばしていた。

「ちょっと、お客さん！」

若い男性店員がおにぎりを掴もうとする男の手を掴みあげる。床に落ちているおにぎりを包んでいた包装を目にした店員は目を鋭くし怒鳴り声を上げようと大きく口を開けたのだが…グシャと嫌な音が響く。店員の顔は背中からはえた黒く大きな手によって潰されていた。血がおにぎりの包装紙、床、壁、カウンターに飛び散る。

「え？」

自然に驚きの声がもれる。

男は何も気にせず血が飛び散っている包装紙につつまれたおにぎりを再び無造作に破り口にいれる。と、希の背後の扉から二―人の男性店員が飛び出してきた。防犯カメラで一連の様子をみていたのだろう。一人の初老の男性店員が希に向かって、

「おい。こっちに来い！そいつから離れろ！」

と大声を上げる。

希はなおもおにぎりを食べ続ける男を見つめたま微動だにしない。彼女の中でまだ何も整理できていないのだろう。

「おい。お前、何してる！警察を」

男はおにぎりを食べる手を止めることなくまた視線もおにぎりや弁当がおいてある棚から左側のパンが陳列されている棚に移しただけでいっさい二人の店員を見ることなく背中からはえていた黒く大きな手を二つに分け二人の店員の顔を潰した。悲鳴も確かな恐怖も感じさせることなく。

希の耳にまた嫌な音が聞こえる。何度も聞いた音だった。だが、今までとはあきらかに音が違うと希は思った。それは彼女がそうやっていた時と音はほとんど同じなのだが、なにか感じ方のようなものが違うということだった。

服越しに背中に生温かいものを彼女は感じた。床に血が広がり、

彼女の足元はすぐに血で満たされた。男の足元を見ると彼の足は裸足でその足はすでに血だまりの中にあった。男は何も気にすることなく、パンを食べていた。
「あ、どして？こんなこと」
声をだすことができたがその声は彼女が予想していたよりもずいぶんと小さいもので、男は気づかなかった。
「どうして、こんなこと」
「んん？」
男はもぐもぐと口を動かしたまま希の方に視線を固定する。どうやら、まだ声が小さいようだった。
「どうして、こんなことするの？」
「ん？こんなことって？なんのこと？」
男はなおもパンを食べながら希の意図を掴みかねるのか聞き返す。希はもう一度くりかえした。
「どうしてこんなことしたの？」
男は彼をまっすぐ見つめる希の瞳と声に何かを感じたのかパンを棚に戻して、
「こんなことって、こいつら殺したことか？」
と聞き返す。
希は無言で男の目を見つめたまま小さく首を縦にふる。
「何でって、人間だから」
悪びれた様子もなく男は一言そう言った。
間を開けず男は続ける。
「それにお前だってさんざんやってたじゃん、人間なのに」
「わたしは、だって、ゲームで…みんなを幸せにしたくて…。あ、そういえば、みんなは！」
希の顔色が一気に明るくなる。
「ああ…みんなは復活してないよ。お前の希は届けられてない。だって、願いは一つしか叶わないから。俺が俺の望みを叶えたんだよ。俺の復活ってな」

今度は奇妙なうすら笑いを希に向ける。
「え？だって、私勝って…」
再び希の声が小さくなっていく。それに伴って顔色も沈んでいく。
「だから、俺が復活したのでお・わ・り。まぁ、礼は言っておくよ」
二人の間に沈黙が訪れる。希は男を見つめたまま、男は希を見つめたまま。
希は必死に男が言ったこと今この場で起きたことを自分なりに理解しようとするのだが、二つのことをいっぺんに考えているのが悪いのかまったく理解できなかった。いや、すでに理解しているがそれを認めたくがないために理解できていないふりをしているだけなのかもしれなかった。
短い音楽が鳴る。そして女性の悲鳴。だが、その悲鳴もすぐに途絶えた。
希が入り口に目をやると先ほど入ってきた女性の頭はすでに潰されていた。違和感が彼女の中に生まれた。
「どうして、殺したのよ？」
震える声で男に聞く。
「さっき答えたろ？人間だからだよ。それにお前だってやってたろ」
希は両手の拳を握り締める。双方の血だまりはすでに繋がってより大きな血だまりになっていた。
「私はゲームで、みんなを幸せにしたかったから」
力ない声で反論する。
「ゲームってさ、そんなことで正当化できると思ってるの？みんなを幸せにするためなら殺していいのか？まぁ、そんな考えもあるさ。でもな、お前がやった事実は消えない。お前だって能力者以外のやつを殺したろ…考えが違っても、過程が違っても、行為者が違っても、理由が違っても結果は同じ。俺とお前は同じだよ」
「ち、違う」

希は呟く。その声はとても小さくて男までは届かなかった。もう一度、声に力をこめる。
「だって、あなたは楽しんでるもの」
その言葉はつい口からでたものでまったく考えなしのものだったが希はその言葉で理解した。ずっと感じていた違うもの。感じていた違和感を。感じていた違和感を希はやっと言葉にできたのだ。そして、言葉にできたことで理解できた。この男が人が人を殺す時に感じるのは楽しさ、嬉しさ、憎悪。そんなものを積極的に感じ取れた。そこで自分と区別をつけた。自分はみんなを幸せにするため、自分のためではないと。だが、同時に何か懐かしいような、共通点のようなものも感じたが、そんなことはないと希は打ち消した。
「だから、言ったろ考えが違おうが俺とお前がやってきたことは同じだって。でもまあ、楽しんでることは確かだよ。やっと人間を殺せるんだ。恨みを晴らせるんだからな」
「恨み？」
「そう。俺はな…人間じゃないんだよ。人間みたいな身体してるけど、お前たちとは全然違う生き物で…もとはそうだな木とか水とかの妖精とかみたいな存在で１０００年以上前にお前たち人間の先祖に滅ぼされたんだよ。といっても完全に滅ぼされたわけじゃなく、俺たちの種族の一番偉いやつが生き残っていた俺たちやすでに殺された奴も含めていろんなとこに封印したんだよ。人間と呼応するようにしてな。この力を手に入れた人間たちは必ず殺しあうだろうからな。そして案の定、そうなった。残ったやつが望みをかなえられるようにしたのも、俺たちがいつか復活できるようにするためさ。といっても眠ってるやつが多いみたいだがな。俺もここまで来るのに何百年かかったか。どのくらいの人間をそそのかして…ああ、最初はコミュニケーションに苦労したなー、日本語だっけ？これも覚えたし。あ、今の解釈はおれなりの解釈な。いづれにしろ、俺たちは人間を滅ぼしたいわけよ」
驚きの表情をしたまま希は問いかける。

「人間じゃないって…ほんとに？」
「ああ。そうだよ。それにしても人間ってのは愚かだねえ。俺たちの能力なんかなくても日々殺し合い、戦争したりさ。人間じゃない俺から言わせてもらうとさ、人間はもっと独立して生きるべきだよ。他人を必要とせず、社会を必要とせず、ルールを必要とせず自分を独立した存在とみなすんだ。まぁ、そんなことできないがね。まず、数が多い。それに自分を独立した存在ではなく、集団の…広くいえば人類の、せばめれば社会の、自分が何かに属していると考える時点でその何かを自分の一部と考えその何かと情報も感情も共有してでもある時いきなり自分は独立した存在とみなし社会なんか気にせず自らの行動したいように行動して、もう一度最初からやりなおさない限りどうしようもないだろうな」
と呆れた口調で言い終える。
「みんなを殺すの？」
先ほどの男が言った言葉などどうでもいい。人間だろうが、なかろうがどうでもいい。希にとって重要なのはそこだった。
「もちろん」
男は迷わず言いきる。希はその瞬間、右手を前に出し、黒く巨大化…させようとするのだができない。
「な、何で？」
思わず驚きの声が漏れる。男にはその動作が滑稽にうつったのか、笑いながら希に言い諭す。
「はは。おいおい。怪のもともとの能力者、つまり本質は俺だぜ？俺がここにいる以上、怪の能力は二つもないんだから、お前が使えるわけないだろうよ」
希は何も言わず、諦めの表情を顔に浮かべたまま目の前の男は見る。その表情から何を感じ取ったのか男は、
「安心しろよ。お前は特別だよ。人間は憎いが、お前は俺を復活させてくれたんだ！お前は絶対に殺さないから安心しろ。お前だけは絶対に殺さない。な？約束するよ」

と優しい口調で言う。
だが、その口調は希には恐怖しか与えなかった。人間を見下している。その印象を受ける。
希は右手を力なく下ろした。
すでに希には抗う気力は残っていない。彼女がこれから取る行動はただ一つ。
懇願。
「ねぇ、私をここで殺してよ」
力ない声で最後の願いをする。それだけが唯一できる行動であると希は考えたのだ。
「ダメだね。お前は恩人なんだ。俺には恩人を手にかけることはできないよ…。さて、じゃあ、俺は行こうかな、人間を殺しに」
次の瞬間、何かが爆発したような音がした。希は反射的に目を閉じて、しゃがむ。何かが彼女のすぐ傍に落ちてきた。‘あっ’と男の存在を再び思いだし探すが、男の姿はそこにはなかった。上を見上げると天井には大きな穴が開いていた。
茫然と希は立ちつくす。しばらくぽっかりと空いた穴を見ていた彼女は不意に何かを感じた。それはずっとずっと彼女が内に秘めていたこと。認めたくないことだった。
「ああ、私、楽しんでたんだ…」
そう言って彼女は微笑んだ。それは自虐的な笑みだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7226j/

UN：KNOWN

2010年10月28日04時13分発行